

火は消した？

えび燿子

義樹の場合

今、私は悪いことをしている。私、近藤義樹は、塾教師のアルバイトをする妻「杏子」と、大学生の息子「徹」、高校生の娘「梢」がいる五二歳の中年サラリーマン。世間からみれば、我が家はなにひとつ不自由なこともなく、まるで、絵に描いたように幸せそうな家庭に見えるかもしれない。「悪いこと」とは……。半年前からの話になるのだが、その日は、夕食が終って二階の自分の部屋に戻り、いつものようにパソコンでメールの受信を確かめていると、その中に見慣れない名前が。

「シネマさん、わたし十七歳の女子高校生です。唐突ですがあなたがよかったですら、私を抱いてくれないですか？ お金が欲しいのです。家は貧乏なので、お小遣いもあまりもらえません。月3000円では、好きな洋服も買えません。ともだちはステキなバックなども持っているのに、私は随分前に買ってもらった物しかありません。同じ高校生なのに、悔しくて涙が出ます。一回二万円でもいいです。一回だけでもいいですからお願ひできないでしょうか。よいお返事を待っています。コスモ」

シネマとは、私のハンドルネームだ。いつもなら、このようなメールは、すぐ削除するのだが、そのまだ幼く下手な文が気になった。同じ歳の娘を持つ身としては、叱るべきなのだろうが、何故かふと、その娘に会ってみたくなっていた。その娘が書いたようなことではなく、そう抱くためではなく、会って話したいと思わせた。ネット上だけの付き合いなど考えてもいなかったし、その娘がどんな人かも知れないのに、その時は何か途轍もないようなことをしたのかも知れない。品行方正な自分を変えたかったのだろうか。そう思いながらも、その娘の容姿などを想像している自分に気付くと、(やはり、いけない。もし、とんでもない事になったらどうするのだ？ 美人局《つつもたせ》かもしれないよ)いつもの良いお父さんの自分が諭してくる。だが私は、今のままの生活では、何かがどこかで壊れて行くような気がしている。(いや、きつとその娘に会えば、何か変わるかもしれない)と。

「お父さん、はやくお風呂入って」

いつもの妻の声がして現実に戻った。結婚して二五年、もう妻の身体も思い出せないほど夜の生活もご無沙汰している。

「分かった」

と言いながら、メールソフトをオフラインにして最小化、タスクバーに置く。パソコン音痴の妻がこのメールを読むことは決してない。このマンネリな生活にも飽きてきたことには間違いない。お風呂から上がると、何のためらいもなく、返信メールを書いていた。

「分かりました。私は妻も子どももいる五二歳の普通のサラリーマンです。お話しだけでも聞いてみたくまりました。会って、こんなおじさんに抱かれたくないと思うかもしれないので、とにかく会って、お話しをしましょう」

送信した後、不思議に冷静だった自分に驚いている。もう二三時、何度か送受信を試してみたが、返事は明日になりそうなのでパソコンはそこで切った。もう返事は来ないかもしれないと思いながら。書斎代わりになっている部屋がいつのまにか自分の寝室になっている。自分専用のパソコンもそこに置いている。妻はパソコンには全く興味を示さず、パッチワークや人形作りなどで忙しい。娘は砂糖菓子のような透明なマツクのパソコンを、部屋で彼女なりに使っている。ドラマ好きな妻も、部屋に一人でいたほうが好きなテレビ番組を見られるので、それに満足しているようだ。いがみ合っているわけではないけれど、こういうのを家庭内別居とでも言うのだろうか。

「お父さん、たばこの火は、寝る前にちゃんと消してね」

口喧しい妻の声が、脊髄のてっぺんあたりでキンキンと響いた。

「分かったよ」

不機嫌そうな低い声で応える。私が妻にかける言葉は、「分かった」しかないようだ。たばこの火は消したが、新たに危険な火がぶすぶすと、身体の中で鈍い音を立てているような気がした。

「梢、いい加減に起きなさい！」

隣の部屋で娘を起こす妻の高い声がして目が覚めた。枕もとの時計は九時を過ぎていた。昨日はパソコンを消した後、テレビで映画をうつらうつらと観ていたので、眠りについたのは三時頃だ。土曜の夜はいつもそうになってしまう。妻杏子は、私を起こそうとはしない、六時間も寝れば自然に起きることを知り尽くしているからだと思う。居間に降りて行くと、梢がはねた髪もそのまま、パジャマのままコーヒを飲んでいた。

「梢、彼氏がここにいたら百年の恋も醒めるよな」

「うるさいなあ、彼氏なんかいないから関係ないもん」

昨日のメールの娘のことを思い出していた。(あの娘は、どんな朝を迎えているのだろうか)

「お父さん、きょうの予定は？ 私は友達とコンサートに行くから、お昼とか適当にお願いね。渋谷だから」

と妻の杏子。

「分かった」

また、同じ返事だ。昔は、どんなコンサートなの？ 誰と行くの？ とか、もつと会話もあったと思うのだが、今は全く興味がなくなっている。バタバタと家事をやつて、杏子が家を出たのは十時、稍もさつきとは違う今風な顔で、いい香りを残して出かけていった。大学生の息子徹は、家が東京の郊外なので、都心の大学の近くに下宿している。私は一度もその家に行ったことはない。教師だった祖父の血を引いたのか、しつかり将来のことを考えているような息子だ。製本のアルバイトをしているというくらいしか息子のことは知らない。部屋に戻るとパソコンのスイッチを押す。立ち上がるまで、NHKアナウンサーの、正しい日本語を聴きながら、新聞の見出しをざっと見ていた。受信すると、昨日の返信メールへの返信が来ていた。こんなにドキドキするのは何年、いや何十年ぶりだろうか。

「シネマさん、お返事をありがとうございます。きっと無視されるだろうと思っていたので、お返事もらつて驚いています。実は、検索サイトの掲示板であなたのアドレスを知りました。映画フアンの集まりのようで、いつもあなたの書き込みに共感していました。その中のあなたの書き込みで、怪しいHメールの文章を紹介して、返事は書かないようになどと注意されておられたので、私が出したらどうだろうかとかイタズラな気持ちで試してみました。ごめんなさい。でも、お返事ももらったら、お会いしたくなりました。突然で失礼とは思いますが、きょうお休みでしたらお会いしたいのです。東京が住所だと書き込みで見えていますので、新宿のアルタの前で一時にお会いしませんか？ 良いお返事をお待ちしています。私も東京です。 コスモ」

驚いた。いつだったかHメールを紹介して、決して返事は書かないようにという書き込みをしていたのを思い出した。その私が返事を出し、それに会おうとまで書いている。なんともいい加減なヤツだと思われたに違いない。しかし、会わなければ何か不都合なことが起こるような後ろめたいような気持ちもあった。しかしそれは言い訳

で、本当のところは、なぜかこの娘に会いたくなっていたのだ。

「分かりました、一時にアルタの前の公園のどこかにいます。探してください。白髪交じりの五二歳です。カーキ色のマフラーをして行きます」

そう書いて、送信していた。もう、後には戻れない。ただ気になるのは、今度のメールの文章が十七歳の娘には見えないことだ。考え過ぎだろうか。新宿には一時間あれば行ける。髭を丁寧に剃り、梢からもらった「サムライ」というパヒュームをほのかな程度に付けてみた。戦場に向かうサムライがお香を浴びるように。外は小春日和だが、北風が肩に力を入れる。アルタ前に十五分前に着いた。行く人行く人に目が行く。十七歳：十七歳：100メートルくらい前からコツコツと近づいてくる四〇代くらいの女性がいる。私の方を見ているような気がする。私の右前で止まった。

「シネマさんですか？」

透き通るような声のその女性は、

「コスモです。十七歳じゃなくて、ごめんなさい」

やはり、予感は当たっていた。

「シネマさん、『サムライ』つけていますか？」

小顔の美しい人にはこやかにそう聞いた。燻ぶっていた火は、緩やかに炎になっていく。

シネマとコスモはコーヒー一杯600円くらいしそうな店にとりあえず入った。少し色が褪せたエンジ色のソファーには、歴史を感じ、使っているコーヒーカップもブランド物で、その店に箔をつけているようだ。飾ってあるベネチアグラスもどつしりと鈍い光を放っていてそこに似合っている。客は少なかった。ふたりは奥のテーブルへ座った。

「シネマさん本当にごめんなさい。でも、こうしてお会いできたので、嘘ついてよかったと思っています」

「いや、コスモさんのおかげで十七歳の女性との妄想をさせてもらいましたよ。なかなかこんなことはできないので感謝します」

「わたし四五歳になります。結婚していますが子どもはいません。夫は海外へ半年ほど出張しています。来月帰ってきますが、またすぐに半年出張です」

「僕は五二歳で妻も子どももいます。しかしなぜ、私に会いたいと思われたのですか？」
「なんとなくシネマさんの文章に艶を感じてしまったのです。わたしは子どもができ

ない身体なのですが、それが分かってから主人との夜の生活はありません。でも最近、シネマさんとそうなれたらと私も妄想してしまったのです。あの内容は全く嘘ではないのです。抱いて欲しいというのは本当の気持ちです」

シネマは、どう答えたらいいいのが迷い、「アマポーラ」の曲が流れるなかしばらく言葉も出せなかった。コスモは下を向きながら、なお、話しをする。

「シネマさんの家庭にご迷惑はかけません。時々私を女にしてくださいませんか？お会いしてますますその気持ちは強くなっています」

男としてこんなうまい話はそうそうないのではないか。コスモを初めてみた時の鼓動は、正直な身体の反応だ。妻や子どもに秘密を持つのも悪くないかもしれないなどと思っていた。そこで軽い食事していると、メールが来た。杏子からである。

「夕食も適当にしてくれない？」

と書いてある。すぐ返信をした。

「丁度よかった、私も友に偶然会って、今から飲みに行くので、そちらもゆっくりしてきていいよ」

神様が（たまには弾けるんだ！）とでも言っているようだ。

「私もあなたとそうになりたいという衝動を抑えきれない。近くのホテルに部屋を取りましょう」

「ありがとうございます。軽蔑されるのではないかと思いつつ告白しました。おまかせします」

こんなにおっとりとした風情の女性から、こんなにも鋭い積極的な言葉が出てくるとは、周りから見ても絶対わからないような、意外な展開になっていた。店を出て、路地を十分ほど行くと、それらしいホテルが四、五軒続いている。勘を信じて二人はすばやくあるホテルに入った。「空（から）」と書いてある部屋の番号を確かめてエレベーターで五階の「505」へ入った。随分昔行ったことがある「ラブホテル」と違って、すっきりとしたインテリアの部屋だ。ガラガラしたイメージしか持っていないなかった自分の脳みそに時代を感じた。そういえば最近全く行っていない街のパチンコ屋も、お洒落なレストランと同じような店構えで、「ペーラー」という名前になっている。

コスモがシャワーを浴びる間に、そんなどうでもよいことを考えていた。シネマはコスモがピンク色のバスロープで出てきた時、後から抱きしめたい衝動を抑えながら湯気で煙ったシャワー室へ入っていった。いつもより丁寧に身体を洗って歯磨きもして

部屋に戻り、出窓から外を見ているコスモを後から優しく抱きしめると、コスモは身をよじってシネマの唇を求めた。甘い懐かしい快感……。忘れていた艶かしい昔の記憶が蘇える。そのまま絡み合いながらベッドへ倒れこんだ。バスローブはいつのまにか剥ぎ取られ、コスモの裸がシネマの目の前にある。その白い肌に吸い込まれるように、シネマの肌も波打った。乳房を優しくそして強く揉む。「あつ、ああ……うう……」コスモの声が、ますますシネマの欲情を昂ぶらせる。「きれいだ……最高だ……」妻以外の女性と肌を合わせているなんて、まだ、信じられない。下半身もお互いを欲していた。まだ、会って三時間しかたっていない女性に種を蒔いた。罪を犯しているような恐ろしさが込み上げてくる。しかしもう戻れない。炎の花は大輪になっていた。

杏子の場合

同じく半年前、杏子は夫に嘘をついた。あの日はコンサートではなく、藤木祐介と会う約束をしていた。藤木は、塾の仲間で、四八歳の杏子よりも十歳も若い男性だ。アメリカに十年いて、帰国してからは塾で英語を教えている。レディーファーストなどが身に付いたお洒落な青年だ。杏子は藤木に以前から、帰りにお茶などの誘いを受けていたのだが、職業柄なのか、なかなかOK出来るような状態にはならなかった。金曜日の夜、塾教師の懇談会で藤木と隣同士になり話しもはずみ、会が終わると酒を全く飲めないという藤木が車で来ていたので、杏子を送るようなことになってしまった。杏子は今まで、藤木を意識しないように努めていたのだが、酒宴の雰囲気というものは魔を誘う。少し酔ってもいた。

「ちよつと遠回りしていいです？」

と藤木は明るく言った。杏子は、なにげなく、

「うん、かまわないけど……」

普段はどちらかと言うと寡黙な藤木なのだが、杏子の前では饒舌だった。ひとり生徒におもしろい子がいるのだが、その子の話で盛り上がって車なら塾から十分で帰れるところを一時間の遠回りをしていた。

「日曜日に僕と付き合ってくれませんか？ 塾とは離れて、近藤さんといろんな話をしたのです。渋谷でイタリアンでもどうですか？」

「そうねえ、たまには私も自由な日曜日を過ごしたいし」

「よかった。では一時ごろハチ公前で」

車を降りる時に、杏子の手の甲へ藤木は優しいキスをした。車が去っていくのをボ―っと見ながら、マフラーを車に忘れたことに気付いたのだが、もうそんなことは杏子にとってどうでも良かった。(日曜日、一時、ハチ公前……) 何度も、その言葉を反芻しながら、家に入っていた。

あのキスが杏子に火を付けた。日曜日、いつものように家事をこなし梢を起こして夫に、「分かった」と言わせて、十時に家を出た。あまり後ろめたさはない。藤木はどいう気持ちで私を誘ったのだろうか、など、空想が巡って、いつもと違うような自分がいた。ウインドーショッピングをしながら、余裕で一時五分前にハチ公前に行くとすでに藤木は来ていた。うぐいす色のセーターに紺のジャケット姿の清潔な笑顔に何故かホッとした。改めて見ると藤木の肩幅の広さが際立っている。

「近藤さんはちゃんと時間を守るんですね」

「そうね、これも職業病かしらね。それよりも、近藤さんはやめてくれないかな？ 名前を呼んで欲しい」

やはりお姉さん口調になっている。いけない、いけない。

「あつ、杏子さんと呼んでいいですか？じゃあ、そうさせてもらいます。ここから五分くらいの店なんです、軽いイタリアンでよかったらそこでランチにしましょうか？」

「軽い方が助かるわ。お昼はあまり量を欲しくないのよ」

「飲み物がたくさんあつて、この時間は飲み放題なんです。行きましようか」

藤木はさりげなく杏子の手を握ってその店へ向かった。杏子は手を握り返しながら久しぶりのときめきで気持ちは高揚していた。

二六年前、杏子は大学を卒業と同時に都市銀行へ就職した。しかし、その単調な業務にあまり希望もときめきも持てず、あるきっかけで、同じ銀行員の近藤義樹と結婚して寿退職をした。寿退職といえば聞こえはいいが、職から逃げたい為の選択だったかもしれない。

お局からの嫌がらせは常のことで、それよりも一番苦になったのが、その銀行はロ―ン相談などのお客によって出すお茶を変えていることだった。その銀行にとって良い客には高級な茶を、どうでもいいような客には、質の良くない安いお茶を出すように言われていた。

他にも人間の裏の嫌な部分ばかり見せられ、そこにもしかするといつか同調して行

くかもしれないようで怖くなっていた。その銀行の中で、近藤の存在は安らぎをくれた。愚痴ばかり言っている杏子に比べるととても大人で、男というものをまだあまり良く知らない杏子には力強い存在だった。お茶のことを近藤に言うと、

「そんなの簡単だよ、どっちにも内緒で良いお茶を入れればいいんだよ」

なるほどそうかと思った杏子はそれを実践したのだが、自分だけがお茶を入れていくわけではないので、誰にも気付かれなかった。近藤はもう二七歳、杏子を結婚前提に付き合ってくれることは、その時の杏子には救いの神のように思われた。一年足らずで退職して、杏子にとつて初めての男と結婚。それから、ただひたすらに二五年間子育てに明け暮れ、気付いたらもうあと数年で五〇歳になろうとしている。これから、何事もなく寂しく年老いて行くだけなのかと思っていた杏子には、きょうは記念すべき日になりそうだ。飲み物をセルフで入れる時に、英語でしゃべっているカップルとちかちか合ってしまう、藤木はカップルに

「Please ahead.」

「Thank you for doing first.」

「No. It is natural. Let's do a happy meal.」

スマートな英会話を爽やかな笑顔で難なくこなす藤木がとてもステキに見えた。

「さすがアメリカ帰りの藤木さんね。惚れ惚れしちゃう」

「なあに、杏子さんも現地に住めば、なんなくしゃべれますよ」

「いやいや、私の場合は発音が問題有りですもの（笑）」

藤木は、英語でしゃべる時には、頭の中はパンとスープを食べていて、日本語をしゃべる時には、ごはんと味噌汁を食べているような感覚なのだという。アメリカでの生活の話や塾の話で盛り上がり、二時間ほどその店にいた。杏子はこんなに心から笑ったのは久しぶりだ。このまま帰りたくないと思つたりとも思っていた。ランチの後、なんとなくいつのまにか中央線に乗り、吉祥寺の藤木が住むマンションへ向かっていた。藤木は初めて会った時から杏子に好意を抱いていたという。一度だけでもいい、杏子とそうになりたい、つまり身体を合わせたいと店を出た時に唐突に告白された。杏子の手を握りながら、

「杏子さんをきょうどうしても抱きたい。これから僕の部屋へ行きましょう」

夫しか知らない杏子に、藤木の手は男の色気を感じさせている。一度だけなら藤木に抱かれてもいいと本気でそう思わせた。夫には携帯にメールでこう送った、

「きょうは夕飯も友だちと食べることになったので夜遅くなりそうです。梢も夕飯はいらないと言っていたから、あなたもなにか適当に食べてね」

多分夫はなんの疑いも持たないだろうということは分かっていた。でもそれは、杏子がそれだけ近藤に信用があるということ物語ってもいる。杏子はそのメールで嘘はついていない、相手が藤木だと言っていないだけだと、自分に言い聞かせたが、今まさに裏切ろうとしている。藤木のマンションは駅から十分もかからなかった。賑やかな通りの中から路地を入ると静かな住宅街。ヨーロッパ風なひさしが出ているおしやれなマンションで、「いいところに住んでいるのね」と言いながら、胸が高鳴った。入り口で番号を押しドアを開く。すぐ、誰もいないエレベーターに乗ると杏子は激しく抱きすくめられた。そして自然に唇を求められる。杏子の身体はもう芯に火がついていた。忘れていたこの感覚。優しい接吻は子宮の快感を呼び起こす。下半身が心地よく充血しているのを感じる。気持ちは、(一度だけ…一度だけいい…また女になりたい…)

「誰か入ってくるといけないから……」

と杏子は言いながら藤木から離れると、藤木は照れ笑いしながら五階のボタンを押した。誰にも会わないまま藤木の部屋に入ると、男の部屋にしては片付いているのにまず驚いた。家具がシンプルで、色使いも地味なせいかもしれないなどと杏子は思いながら、ふかふかのうすいグレーのソファに沈んだ。

久しぶりの男の匂いは、随分昔のドキドキを蘇らせてくれた。藤木は優しく上手にリードしてくれる。そして杏子に、自分は、確かにまだ女だったということを思い出させてくれた。ことが終わってからも続く心地よい愛撫で、白い杏子の肌はうっすらと汗ばんで、光って、美しかった。

「杏子さん、感激です。時々こんな風に会ってください。杏子さんが嫌になるまで付き合ってください。無理はしないでいいですから」

(私ってまだ魅力あるのよ)と、杏子をもう忘れている義樹に言いたくなっていた。

徹の場合

徹は、半年前のその日は、下宿の自分部屋に居た。暗い顔をして。親友に彼女を寝取られても、まだ、親友と友だち付き合いをしている自分が情けなく、自己嫌悪に苛まれながらも、親友に対して愛想笑いをしている。彼女と言っても、親友にはそのこ

とを話していなかったの、彼女が話さない限り二人の関係はわからない。今思えば、彼女は（敢えて名前は言いたくない）親友とそうなりたい為に、自分と付き合ったのではないかと疑いたくもなるのだ。それでも、友情を繋ぎたいほど、親友は自分にとって、魅力的ないい男だと言う事でもあるのだが……。彼女は永遠に自分とそうなったことは言わないと思っている。自分がそれでも親友と争ったり絶交したりしない男だと、悔しくも見抜かれているから。自分は、それだけしたたかな女に利用された、全くなさけない男だと言うことを認めざるを得ない。余計なことを喋らないという性格も分かった上での彼女の犯行？としか思えないけれど、もし、彼らが結婚したら一生その辛さを抱えていかなければならないと思うと、気が重くなってため息が出てしまう。彼女の気が変わってくれることを願うしかないのかと、徹の部屋の中は、どんよりとした空気で澱んでしまうようだ。その暗い空気と違って、外はいい天気。一週間分の洗濯物を取り込んで、たたみ方が随分手際よくなっているなどと、ほくそ笑んだりしている。その日の夜遅く、ふと母の声が聞きたくなり、実家に電話を入れてみた。母が出た。トーンの高い、いつもの母の明るい声で、男から息子に戻る。

「たまには帰りなさいよ、顔を忘れられないうちにね」

家は何事も変わらないようだ、なんとなく安心している自分がいた。（あんな女なんて、さっさと忘れな！）と、自分に言い聞かせながら。

梢の場合

梢は、同じ半年前の日曜日に下北沢にいた。その町は、古着や可愛い服、雑貨などがたくさんあって楽しめるし、演劇やライブも見逃せないものがあったりする。古い町並みなのに若い人ばかりが歩いている。たまにそうでもない人もいるが、なんとなく浮いて見えてしまう。ただ、レトロなカフェの店先でイスでお茶を飲んでいるお洒落なご老人は、似合っているから不思議だ。梢は、二年付き合っている同じ学年の彼と、それぞれの店を覗きながら歩いていた。来年はふたりとも受験生なので、今まで通り頻繁に会えなくなるのを感じながら、もしかしたら、進学する大学も違うので、この付き合っても自然消滅するかもしれないということを、ふたりとも実にクールでドライな感覚で捕らえているようだ。一度、生理が一週間ほど来なくて、慌てたことがある。母にはその彼氏のことを話していたので、母だけには相談したが、間もなくそれはあった。そう、妊娠の恐れはなくなった。体調が優れなかったこともあった為の

遅れだったようで、あの時ほど、胸を撫で下ろすという言葉がぴったりだったことはなかった。これは父には絶対知らせてはならないと、母と娘二人だけの初めての隠し事になっている。彼氏と、もうそんな関係があるなんて知ってしまったら、父は大変なショックを受けそうだし、知らせない方が良いと判断したからである。こんな時は、母親と言うのは案外冷静なのだ。人工中絶というのは殺人と同じだと、いつも言っている母も、娘のことになると、そう思えなくなっていたようだ。こんなに早く、母にさせたくないという気持が、正直あったという。人間って、自分の都合に合わせるようにできているだと、つくづく思ってしまう。それから、彼も梢も随分注意していた。ただ、このドライな関係になった今は、あの時は本当に妊娠していなくて良かったとしか言えない。

義樹も杏子も、はじめは一度だけの裏切りのはずだったのに、その逢瀬は半年続いている。家庭での生活は、表面的にはなにも変わっていないけれど、慣れのような曖昧な関係がいまだにあった。

三月十一日午後二時四六分、そんな日常が一遍に変わるような出来事が起こる。義樹は二〇階建ての会社ビルの九階で、デスクワークをしていた。コーヒーを入れに行こうと立ち上がった時、それは突然来た。地震だ。今まで体験したことがない縦揺れ、いつもより長い横揺れ。キャビネットが一つ倒れたが無事だった。どこが震源地だろうか？ 相当の被害があるかもしれないなどと考えながらも、一番先に浮かんだのは妻杏子の顔。つづいて梢、徹の顔。家族だけしか思い浮かばない。今まで、気づかずにいた家族への義樹の芯の気持が現れたようで、面映い。ツーと涙が零れた。この半年いったい何をしていたというのだ。その地震は東北の沖が震源地で、震度9。テレビで見た津波の映像で、たくさんの町が消えていく現実に呆然とした。東京も5強だった。義樹はコスモに連絡するのを止めようと決めた。コスモも同じ感情だったのかもしれないとふと思いつながら、彼女への思いがスーッと冷めていくのを感じた。ただ、今は杏子が愛おしくてたまらない。

杏子は家で地震に遭った。一人だったので、その恐怖は並々なるものではなかった。しばらく震えが止まらず、義樹の名前を呼んでいた。決して祐介ではなかった。しばらくすると梢が帰ってきた。思わず抱きしめていた。何時間も携帯は通じず、携帯はなんの役にも立たないことも分かった。家族の状態がわからないこの不安さは、こん

なに苦しいものだとは初めて体験した。梢は、四時限からの講義だったので、三時過ぎの電車に乗る予定だった。駅に着いてから、まだ電車の時間には少し早かったので、ドトールでコーヒーを飲みながらレポートを書いていた。梢はそこで地震にあつてしまったようだ。もし、その時電車に乗っていたら、帰宅難民になっていたであろう。運が良いとはこういうことをいうのだろうか。バスの運行は普通だったので、無事に家に帰って来ることができたようだ。徹は、バイト先の会社の電話が通じたので、無事が確認できていた。五時間後にやっと携帯も通じて、いままで来ていたメールが、一遍に受信されていた。義樹から、徹から、梢から。最初は徹から、

「大丈夫？　こちらはOKだから心配しないで」

梢からは、ひとことずつ五通も着ていた。

「地震だ！」「おかあさんーん！」「こわいよー！」「おかあさん大丈夫？」「もう、会えなかったらどうしよう」

義樹からは、

「そちらはどうだ？　こちらは大丈夫だ、火は消したか？　遅くなるけれど、歩いてでも絶対帰る。今、無性にみんなに会いたいから」

杏子は、こんな時にこんな熱いメールを義樹からもらうとは、と驚きながらも、嬉し涙を止められない。杏子も同じ気持だったから。結婚前の義樹の存在はとても大人で、安らぎをくれて頼もしかったのを忘れて、私は何をしていただろう。決めた、塾はもう辞めようもう藤木に会わないと。義樹に返信をした。

「徹も梢も私も無事です。火はきれいに消しましたから安心してね。気をつけて帰ってきてください。今夜は寝ないで待っています」